002694-000-7

特16-677

平壤日清陸戦実記

吾妻　逸郎／編

M27

ACB-6131

口演

余輩帝國臣民として今日の景況在韓軍人諸士及海上勤務諸士の勤勞想像し來れば轉高枕安臥するゝ不忍既ゝ各自應分の義捐出金及報國慰勞の企圖あり實ゝ國家の爲め慶賀すべきとあり余輩元來一寒生一錢の蓄財なく一介の物品なし然りと雖赤心報國臣民の義務を負擔するゝ甘受する處あり否進んで其義務を盡さんと欲する精神い敢て同胞諸氏に讓らざる處あり故に今回知友比叡艦乘組士官某氏の直話及在韓知己某氏の報道に依り一小冊を編製し以て在野同胞諸氏に當時戰地の困難筆舌の及ぶ所に非らざると分報し併て販賣爲若干を以て義捐し聊か其辛勞を慰酬せんとす乞ふ在野同感の諸氏よ余輩の微意を洞察し共に國家に盡すの義務を負ひ其素志を贊助あれば幸甚

明治廿七の年秋十月

編者　吾妻逸亭謹述

明治廿七年十月廿六日印刷
同　十一月三日發行

長崎市寄合町五十四番戸士族
編輯人兼發行人　吾妻逸郎

長崎市麹屋町七拾六番戸
印刷人　渡邊善三郎

長崎市西濱町新地通
印刷所　築地印刷所

長崎市寄合町四十七番戸
發賣所　中冨商店

（定價貳錢五厘）

平壤日清陸戰實記

我帝國の戰爭は古より近世に至る其數少なしとせず然りと雖イツモ兄弟喧嘩にして未だ曾て外國と交戰せしとなし只一回豐臣秀吉朝鮮征伐の舉ありしも其結果意を果かさずして止めり爾來其舉未だ曾て見聞せしとなし然るに本年即ち明治廿七年第六月以降朝鮮國より葛藤起り遂に今回の事變に及ぶ然して我同胞の勇氣膽力遂に此の効と奏す乍然其困難想像の外なり今左に其精細の報道を列記して同胞の困苦筆舌の及ぶ可からざると示さん

大日本帝國陸軍の一隊は九月十五日までに鄭峯より元山の諸口より平壤に迫り師團本隊は大同江の下流に棟うちて成風凜々として平壤の西面に迫り大島混成旅團は（少將）本海道を蹂躙し來りて意氣敵勢を呑めり而して十五午前四時第一面大島混成旅團は全軍營を撤して敵軍の攻擊に從ふ西島中佐右翼隊長たり歩兵一大隊及二ケ中隊砲兵一中隊分捕砲小隊及衛生隊半部を率ひ更に二ケ中隊を拔き羊角島を經て對岸に至り敵の側面に當る餘は水樹橋の柳蔭に陣せり一ノ戸少佐は殿備隊長たり歩兵一大隊工兵一中隊を率ひて全軍に殿す續て後方に野戰病院輜重縱列山砲彈藥縱列糧食一縱列を置けり余等は山上にありて乾坤を伏仰すれば十五日の殘月淡々として敵味方の陣營を照らし山下一面茫々たる原野湛々たる冷露と畳く午前四時五分天地の寂寥は我軍の左翼に於て破られたり水潟橋より船橋里に至る間の道路は兩傍に楊柳鬱蒼として蔽ひ船橋里の邊に至りてはいよ〳〵森々たり林中二ケ所の堅牢なる敵壘あり少しく左方に離れて更に二ケ所の小堡を築きて敵兵之れに據る我軍は黍田の間に伏して壘に

據るの敵ゑ向ふ地の利固より破れゑありて我れにあらず況んや敵は精銳なる連發銃と以て戰ひ雨の如く霰の如く我軍を射擊す我は村田銃の單發と以て之に應ぜ武器の鋭利も亦彼れにありて我れゑあらず敵は堡壘の高處に身と隱して凹處に下嘯亂發す我れは少しの據る處なく又支ふゑ一物なく敵に仰し畦に臥し草に隱れ石ゑ肱づき進むを知つて退くを知らず一片耿々の氣を以て戰ふ此日敵の精銳は盡く船橋里の方面に集まり牙山の敗兵は曩日の耻辱を此一舉に雪がんとして死を決して戰ふ東天白を浮ぶるの頃両軍の戰ひはいよ〳〵激烈となれり只見る一面茫々として濛霧の間ゑ沒するの時両軍の銃丸流星の如く紫電に似たると硝烟漠々異臭鼻を衝き幾多の森林は火と煙を以て閉まれ了はんぬ午前四時三十分敵銃の聲恰かも武力を叩くが如く益々激し愈々激烈となるや吶喊の聲は天地を震動したり

程なく再び吶喊の聲勇ましく聞えて敵の第一壘は此響の中に陷ゐりたり是時に當り左翼の我軍來り會し敵壘第二の右側に迫り銃銃と戰ひ砲砲と戰ふ硝烟天に漲りて腥風陣々二十餘門の大砲は數千の小銃と其聲殷々萬雷の一時ゑ轟くが如く山より谷に響き渡りて光景慘憺たり午前四時五十五分に至り喇叭劈曉雜音と排して起り第三回の吶喊は一層勇ましく聞えたり看よ壘を拔きて壘に逼る我軍の勇氣を看よ敵の第二壘も亦一鎚に於て拔んとするとき敵は死力を盡して禦き戰ひ壘ゑ隱れて銃を取り替へ我兵の進ひを見れば一分の間斷無く打續け我兵をして敢て近かしめず加之大同江の對岸左右の敵壘よりは榴彈を以て我軍を攻擊し防戰頗る力ひ而して我大砲は千二百メートルなる後方の山より發して榴散彈と敵軍に注ぐと雖敵軍

大同江渡河

は僅かに百メートルの地に於て我軍を砲擊す斯る接戰の場合よりては我が大砲の陣地惡しく兩翼の砲兵も是を以て十分に敵勢と拙き得ざりし我兵は奮戰大地に平伏したるまゝ少しも動かず喊喊又喊喊兩軍の死傷極めて多し此時に當りて我右翼の砲兵は山を下りて牡丹臺の對岸に進み來り大に敵兵を砲擊し第二壘に逼りたる我兵は尚大壘に伏せり第二壘は之を第一壘に比それば其高さと二間餘厚さも亦之に準ぜ況んや繞らせる空壕を以ても是を以て容易に陷ゐるべからぜ我軍は唯だ身を挺して大膽に敵壘に肉迫せるの一あるのみ同六時三十五分に至り大喊喊は能く堅牢なる敵の第二壘を陷ゐるゝを得たり此時敵兵の死せるもの三十餘名我兵の死傷亦五十餘名に上れり第二壘の敵壘は實に血を以て之を得たるなり第二壘を破られし敵は直に第三壘に縮りたり第三壘は之れを第二壘に比すれば高さ六尺堅牢も亦幾倍と第三壘より第二壘を見れば實に眼下に在り三壘より來る敵の彈丸は篠つく雨よりも多く第二壘に飛び來り榴彈又壘の周傍に於て破裂す如何に精銳なる我兵も得て支ふべきにあらず同六時五十分第二壘は再び敵の手に落ちたり

是より戰鬪はいよ〳〵激烈を加へ將校の斃るゝもの兵士と相次ぎ流血淋漓として壘外に流れ死屍の上に死屍重なり傷者の上に傷者倒る我衛生隊は必死を以て硝烟彈雨を冒し負傷者の救護に盡力したり然れども非常の大戰爭あるを以て衛生隊と負傷者の數と相協はず彼我の死傷は壘の近傍に累々たりし嗚呼亦慘酷なると云ふべし午前七時に及びて戰鬪稍々靜まりて砲聲も亦輕し此機を以て余等諸方面の戰況を觀れば奥山少佐の引率したる左翼隊の一部は午前四時四十五分分捕りたる敵舟八艘を以て半角を越ゑ續々對岸に上陸し未だ一小隊も渡り終らざるに忽ち敵兵の爲めに認められ大に砲擊せられしにも拘らず不完全なる韓船に乘じて一軍二中隊對岸に上陸し今や敵壘を衝きて奮戰中なり又蒲峯元山諸方面の戰聲は豆の殼を燒くが如く大砲山に轟ろきて遠雷の雲を起すが如く牡丹臺上に一朶の白雲起るは天外より飛び來りたる彈丸の敵壘の上に爆裂せるなり蒲峯路の榴散彈なり師團本隊の銃聲なり共に激烈にして天地を震撼し全局の光景宛然修羅の巷の如し清兵第二壘を奪還して後一時靜まり居たる船橋里の戰は此時に至りて再び猛烈を極む敵は固より必死我も亦奮鬪少時劇鬪の後大々的喊喊の聲は起れり此喊喊と共に第二壘は再び我軍の手に落ちたり戰鬪いよ〳〵激して我軍增々進む我れは彼れの第三壘を奪わんとすれば彼は奪われたる第二壘を奪還せんとす双々相對峙して寸歩も動かざるの景は之を凄じといわんも愚かなり此時眼を左翼に轉ずれば平壤城外火起て烟焰天に湧く失火か燒撃か一同は瞳を凝して之を望む圖らざりき是敵兵の自ら火を放ちて壘を燒ける狀なり窮狀茲に至つて既に顯わる又敵軍なる中丘の陸營を見れば騎馬幾隊續々として山を下り倉庫の外に彈を運搬す敵は果して兵を增して進擊し來るか將た逃亡の道を開かんとするか一束の疑問は彼等の上に投ぜられたり刻轉じて午前九時卅分となりぬ益々烈を加ゑたるは船橋里の戰なり地勢上よりすれば我れは到底彼の第三壘を拔くべからず而も忠勇剛膽なる我が兵士は是非とも彼の第三壘を拔かんとし進んでは斃れ斃れては又進み壘外死傷相接す殊に中央右翼の二ケ中隊の如きは將校全く斃れて士卒半死傷したり此時に當りて勇武なる大島混成旅團長は挺身進んで戰鬪線内に入り以て全

軍を督勵す敵の流弾大島小將の胴を掠めて去り通辨某の中腕を貫く通辨は忽ち其場に斃れたり我軍の苦戰實に其極度に達したり長岡參謀劍を拔て自ら陣頭に立ち勵聲軍を指揮す戰は茲に再び大活氣を復したり午前十時に至り敵兵數十は拔刀隊を組織して青龍刀を打揮ひ身を躍らして我軍に入る拔刀隊は身に赤色の衣を穿ち面貌獰惡宛然夜叉の如し我が兵は地に伏して戰ふの際と云ひ敵と相距る僅かに十メートルに過ぎざりしかば拔刀隊の爲めに負傷したるも少おからざりしが寸と得れば寸と守り尺と得れば尺を進む義勇無双なる我軍人の精神は誰か能く之と奪ふと得ん百彈前後に破裂し萬丸左右に注ぐ兵半ば斃るゝも尚は死守するのみならず隊あらば直に第三壘を拔かんとす嗚呼我軍の意氣亦壯ならずや此時敵は大同江の舟橋を渡りて彈丸硝煙と第三壘の内に運び銳利無倍の銃を持ち來り彈藥を裝ふて既に彈尽き盡したる他の銃と代へ連發又連發彈丸雨注午前十時四十分火四ケ所に起る而かして舟橋里の民家も敵の爲めに放火せられ大樹は悉く敵兵の亂伐に逢ひ我兵は一の據る所おきに至れり是より正午に至る間は絶えず劇戰あり吶喊時々起り斬り込み往々來る我兵は第三壘を拔き得ず敵兵は第二壘を奪還し得ず只鮮血滴々として草木を染め阿鼻叫喚の聲響き渡りて凄ましきと見るのみ此儘にして數時を經過せんか屍山血河とは其形容詞にのみ用ゆべきものにあらざるを學び得ん眼を轉じて諸方面の戰況を觀るに火は三十餘ケ所に起りて黑煙天に滿ち白日と變ふて四顧暗澹たり實尚夜の如く雲色灰に似たり元山鎭寧路の砲壘次第に近き來るは確かに我軍の迫み來るあるべし師團の方面亦依然として砲聲轟けるは戰正に酣なるを知るべし又我右翼の炮隊は大同江に迫りて敵軍を射擊し敵は高所に在りて樹木の障害を利用す我れは平地に在りて一の楯無し炮隊は茲に後方の小丘に退却して射擊す

我將死し我兵斃れ而して敵の第三壘は拔けず大島混成旅團長は悠然劍を案じて挺身敵壘と衝かんとす意氣大に決する處あり武田中佐長岡參謀は少將の馬を控へて曰く米だ閣下の死すべき時に非らず說くこと再三少將漸く止まる時既に午後一点鐘敵はいよ〳〵ます〳〵激烈あり火は西より廻りて北に燃へ敵營殆んど烟焰中に沒す見來れば舟橋里附近も亦火所々に起りて赤龍黑龍を捲くの觀あり而して天は一帶に一種異樣の色を變じ腥風鼻を掠めて層一層凄然たり只見る奥山少佐の二中隊は大脈不敵にも既に大同江の對岸に在りて孤軍衆敵の中に入り師團本隊と聯絡を通せんとするも如何せん多勢に無勢數千の清兵に取り圍まれて苦戰するに餘りあり越えて午後二点鐘諸道の戰色漸く衰え牡丹臺上復た榴彈の破裂するを見て元山路の炮壘も亦靜かなり乃ち一時休戰の姿となりしあり更らに四十分を過ぎて舟橋里第三壘の敵兵は一大吶喊と以て第二壘に攻め來りたれば茲に一大大激戰は起るべきの處不思議にも戰勢は一轉したり風雨の勢を以て進み來りたる清兵は踵を返しぬ我軍に於ても亦全軍退却の命下りぬ此一刹那若し我軍の軍配にして其宜しきを得さらんか我軍は實に敵彈の爲に非常の死傷を來たせしふるべし而も軍配宜しきに適し我軍も亦四方に大圍を盡いて退きたれば復た一人の死傷無くして軍を收めたり奥山少佐の一隊も亦再び大同江を渡りて退却したり此日は朝來大小的激戰ありしかば硝烟炮聲腥風血雨の爲めに擾亂せられたる空氣は非常に激變して雲を起し風を呼び一天黑の如

く疾風樹林を捲て來り大雨沛然として恰も河海を覆すが如く迅雷殷々として山岳震動す然れども大同江對岸の大勢卽ち平壤城の猛火ハ炎々として益々熾んなるあれり

後四時兩軍の戰鬪全く止み四道の銃聲亦絶へたり

此夜十一時過平壤内ハ在りし清兵ハ我軍の隙を窺ふて元山路ハ向け遁逃と初めたり平壤ハ既ハ四面楚哥の中にあり到底之を守り得るの算無ければあるべし然れども遁逃するも彼決して脫れ得べきに非らず我軍之を路ハ要して一舉塵殺と試みたり敵兵ハ恰も籠の鼠の如く我軍の爲めハ殺されたるもの實ハ一千餘名生擒せられたるもの實ハ六百有餘分捕山の如く金銀合計百廿萬圓然して我將校下士卒合計三百餘を失へり

十六日平壤城陷落

猥明我軍四面より吶喊して平壤城に入る敵兵直ちハ潰ス

忠勇無双の我軍ハ　苦もなく踰て進み鬼
險阻と恃みし敵兵ハ　如何臆をば冷しけん
皇御國の兵士ハハ　翼ありとや思ゐけん
頃しも秋の十六夜の　月ハひらめく日本刀
炮烟彈雨遙間なく　平壤城と攻めかこむ
多勢を恃みし敵兵も　道なき隊ハ治まらず
暫し支へて防ぐ間も　嵐ハ木の葉と亂れ散る
實ハ理りや昔より　仁義の師ハ敵ハなく
光り正しき日の蔭ハ　もろこし迄も輝けり
此の勢ハ飛じあば　凱歌ハ近き内あらん
渤海樹ハ深くとも　北京の城ハ遠くとも

て死守するもの更ハあし我兵難なく平壤城を乘取りたり

戰後平壤城内ハ入つて見る所ハ何者ぞや屍ハ巨江の岸ハ滿ち血ハ長城の窟ハ充つ

十七日清兵千餘ハ五百隊を爲して義州路ハ落ち行きたり然れども我軍の爲めハ願安ハ捷て一打擊を加へられ道を轉じて廣西ハ落ち行き此處ハても亦我が安光少佐の一隊ハ逆擊せられ卽日我二大隊の軍人ハ敗殘の敵兵追擊の命を受け進發したり

清國損害之概算

合計概略

百五拾萬圓

死人捕虜大山の如し

平壤の大勝

大同江ハ廣けれど　大城山ハ高けれど